

『日文與日語』からみた張我軍の日本語教授観

—1930年代の中国大陆における日本語教育の一側面—

賈 鵬 飛

The Japanese-teaching Concept of Zhang Wojun from the aspect of “Nichibun To Nichigo” :

An aspect of Japanese-education on mainland China in 1930s

Jia Pengfei

台湾出身の張我軍，在1930年代中国大陆の日本語学習熱潮中，除在北京各高校担任日本語教師以外，還編寫多種日本語教材，創辦日本語學習雜誌，開設日本語培訓班，從無名小卒一躍而成為了日本語教育界的“著名人士”。七七事變之後，他還活躍在華北淪陷區的各种日本語教育機關。所以，張我軍的日本語教育實踐的解明對於中國的日本語教育史研究來說是不可或缺的一環。但是，歷來關於張我軍的研究多是圍繞其文學活動展開，缺乏對其日本語教育的深入探討。

本稿以張我軍多年日本語教學經驗的集大成《日文與日語》雜誌為研究對象，在對其中的日本語教育相關論述和日本語講座分析之後，考察了張我軍的日本語教授觀。張我軍在日本對華侵略加深的當時，指出應“正視日本，研究日本，認識日本”，而實現這一目的直接途徑便是，掌握直接閱讀日文书報的能力。圍繞這種能力的養成，張我軍提出來一種新的日本語學習法，即“語法+讀本”。這種學習法強調通過讀本自然而然地習得語法知識，並重視在句子結構上和漢語的異同，以及在習得過程中的趣味性和效率性。並且，張我軍躬身實踐，在《日文與日語》中開設日本語講座，將“語法+讀本”這種新的理念應用到日本語講座的讀本編寫中。另外，從其對讀本的講解中所表現出的“重視漢語譯文的利用”，“重視句子結構的分析”等特徵，可以看出其理論與實踐的一致性。但是，關於張我軍的日本語教授理念的形成功因以及在當時與之後的影響，作為今後的課題還有進一步深入探討的余地。

关键词：1930年代，《日文與日語》，張我軍，日本語教授觀，“語法+讀本”

1. はじめに

張我軍は1902年に日本統治時代の台湾に生まれ、公学校に通って日本語を「国語」として勉強した。1920年代に、『台湾民報』の編集者を担い、一連の文章を発表して台湾の新旧文学の論争を巻き起こした。その後、中国大陸に留学し、北京師範大学の国文学部に入学した。1929年に卒業した後、日本語教育に携わりはじめ、北京の諸大学で日本語教師の職に就くとともに、日本語教材の作成、日本語学習雑誌の創刊、日本語学習塾の開設などにかかわり、学習者に信頼と好評を博し、日本語教育界の「著名人士」として評価された¹。1937年に北京が占領された後、北京近代科学図書館と偽北京大学の日本語教育に関わり、華北政務委員会教育総署編審会や華北日本語教育研究所などの華北淪陷区の日本語教育の中心的指導機関に関与し、戦時中の日本語教育にも大きな影響を与えたと考えられる。したがって、張我軍による日本語教育の実態の解明は、戦前と戦時中の中国大陸の日本語教育史研究にとって不可欠な研究だと言える。

これまでの張我軍研究には、文学や翻訳における業績を中心に書かれたものは多いが、日本語教育における業績に触れたものはあまり見られない。そのため、拙稿（2018）では、張我軍の日本語教育実践の業績や張我軍の生涯における日本語教育実践活動の位置づけなどを考察した。しかし、その本旨は教材分析ではないため、張我軍による日本語教授の方法や特徴などについては触れていない。そこで、本稿はその不足を補うために、張我軍の多年にわたる日本語教育経験の集大成である日本語学習雑誌『日文與日語』を分析対象とし、張我軍の日本語教授観を明ら

¹ JACAR（アジア歴史資料センター）RefB10070618200（第11画像）、三増英夫調中華民國ニ於ケル日本語研究ノ現況（附. 日本近代科学図書館論）1937年（文化_37）（外務省外交史料館）

かにすることを目的とする。

本稿の具体的な展開としては、まず第2章では、『日文與日語』の作成背景や影響力や構成などの基本情報について論述する。第3章では、『日文與日語』に収録された張我軍の日本語教育に関する論述を分析対象とし、張我軍が提案した新しい学習法の特徴などを考察し、張我軍の日本語教授理念を確認する。第4章では、『日文與日語』の紙面を最も大きく占めている日本語講座に対する分析により、張我軍の提唱する教授理念をどのように実際の日本語教育実践に取り入れたのかを探究する。

2. 『日文與日語』について

日本の対華侵略が深まり、中国人による自主的な日本研究や日本語学習の気運が高まった背景の下で、張我軍は1934年1月に、以下のように「日本を正視し、研究し、認識する」ことを発刊趣旨とし、雑誌『日文與日語』を創刊した。

従来の中日関係を詳しく考察すると、学術や文化においても、政治や外交においても我が国は終始消極的で受動的な立場にある。これがおそらく何回も失敗した最大の原因であろう。(中略) このような状況を変える大前提としては、日本を正視し、研究し、認識することである。親日であれ反日であれ、この大前提を無視しなければ、失敗の悲劇を繰り返すことはない。本誌はこのような立場に立ち、わずかでも国民の職分を果たしたい。² (下線は筆者)

² 張我軍「本誌の使命」『日文與日語』創刊号、1934年、2頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我們詳按有史以來的中日關係，我國始終處於消極的，被動的地位，學術文化方面如此，外交政治方面更如此，這恐怕是我國歷次失敗的最大原因。(中略)然而這裡須有一個大前提，就是正視日本，研究日本，認識日本。無論結論是要親日或要反日，都不得忽視這個大前提，方不至重演失敗的悲劇。本誌便是站在這樣的立場，要盡一點國民的職分的。」

『日文與日語』は1934年1月の創刊から、1935年12月の停刊まで全3巻24期にわたり、北京の人人書店によって発行された月刊誌である。第1巻は全12期、第2巻は全6期、第3巻は全6期である。当該誌は主に日本語教育関係の論述と日本語講座からなっている。そのうち、日本語講座は紙面の大部分を占め、「基礎日語講座」「中級日語講座」「高級日語講座」「文語文講座」「会話講座」「書簡文講座」などがある。日本語教育関係の論述は20数篇あり、内容によって2種類に大別することができる。一つは日本語学習における疑問や難点に対する回答であり、もう一つは日本語学習の目的や方法などに関するものである。ほかに当該誌には「答問欄」「懸賞翻訳」「読者論壇」などのコーナーもある。これらのコーナーは学習者との交流を図るために設置され、学習者の質問に対する回答、学習者が投稿した日本語訳文や日本語学習の心得に関する文章などが掲載されている。

『日文與日語』は日本語学習に関する専門雑誌として発行された後、每期3000冊ほど販売され³、読者は中国各省だけでなく、日本やタイなどの海外にも存在した⁴。また、毎期の頁数が最初の32頁から漸次150頁ぐらいまで増加された。当時、日本研究や日本語学習関係の雑誌は多く創刊され、1930年から1937年まで15種類に達したが⁵、日本語学習雑誌には『日文與日語』のように長く続けられるものが少なく、創刊後半年未滿で停刊したものが多かった⁶。このことから、『日文與日語』は、当時の日本語学習者に好評を博していたと考えられる。

雑誌の編集においては、当時の代表的な日本文学者である周作人⁷と

3 「別矣読者」『日文與日語』（第3巻第6号）、人人書店、1935年、2頁。

4 「人人書店緊要啓示」『日文與日語』（第3巻第6号）、人人書店、1935年、4頁。

5 林昶『中国的日本研究雜誌史』（世界知識出版社、2001年、69頁）を参照。

6 「日文與日語社特別啓示」『日文與日語』（第2巻第4号）、人人書店、1935年。

7 周作人（1885～1967）は中国の散文作家、翻訳家で、日本に留学した経験がある。1930年代、国立北京大学で日本語と日本文学などの科目を担当していた。

錢稻孫⁸が『日文與日語』の編集顧問に招聘されたが、数篇の文章や訳文以外、雑誌の編集や運営などにはあまり関与しなかった。雑誌の根幹的な内容となった日本語講座や論述は、主に編集長である張我軍によって執筆された。張我軍の息子の張光正によれば、1934年から1935年までの2年間、張我軍はこれまで経営していた日本語学習塾を閉鎖し、『日文與日語』の編集に専念したという⁹。

数多くの日本語教材や日本語学習雑誌が発行された1930年代に、『日文與日語』が当時の日本語学習者に好評を博し2年間続けられたのは、日本語教授における張我軍の工夫と切り離せないと考えられる。以下では『日文與日語』の日本語講座や日本語教育関係の論述を分析し、張我軍の日本語教授観を考察する。

3. 張我軍の論述に表れた日本語教授観

張我軍は『日文與日語』において日本語講座の執筆以外に、日本語学習の目的や方法などに関する一連の論述(表1)を発表した。その中の1巻2号の「怎麼樣学習日文」(どのように日本語を学習するのか)では、従来の日本語学習法の特徴と欠点が検討され、新しい学習法が提唱された。1巻5号の「爲日文課程事告學校當局」(日本語課程について学校当局に訴える)と1巻6号の「關於日文課程的另一忠告」(日本語課程についてのもう一つ忠告)においては、当時の大学の日本語教育の効果が検討され、学校側、教師側、学生側に対するそれぞれの改善策が提言された。この3篇の論述は張我軍の日本語教授観が反映されたものだと考えられるため、日本語講座に対する分析の前に、日本語教授にお

⁸ 錢稻孫(1887～1966)は中国の翻訳家で、幼い頃、慶應義塾幼稚舎に入学し、その後東京高等師範学校附属中学校にまで進んだ。1930年代、清華大学外国語学部の講師として日本語を教えた。『万葉集』などの多くの日本文学作品を翻訳した。

⁹ 2018年6月26日に筆者が張光正にインタビューした際、張光正が自ら語ったことである。

ける張我軍の基本姿勢を確認しておきたい。

表1 『日文與日語』における張我軍の日本語教育関係の論述

題名	主な内容	巻・号
爲什麼要研究日文	日本語学習の必要性	創刊号
怎麼樣學習日文	従来の日本語学習法と新しい日本語学習法について	1-2
翻譯雜談	日本語翻訳の現状と問題	同上
怎麼樣學習日文(二)	各品詞の学習方法	1-3
爲日文課程事告學校當局	大学の日本語教育に対する提言	1-5
關於日文課程的另一忠告	大学の日本語教育に対する提言	1-6
日本の新聞與雜誌	日本の新聞や雜誌を読む方法	2-2
別矣讀者	停刊原因や日本語学習の必要性	3-6
二十五年以後的工作	停刊後の日本語教材作成計画	同上

(『日文與日語』より筆者作成)

3.1 日本語の読解力養成を目指した教授目標

前述のように、『日文與日語』は「日本を正視し、研究し、認識する」ことを目的として創刊したものである。この目的を実現させる具体的な方法としては、創刊号の「本誌的使命」(本誌の使命)において以下のように述べた。

日本を正視し、研究し、認識することにおいて、最も積極的で適切な方法は日本語の書籍や新聞を読む力の養成である。(中略) 現在、国内では日本のことを紹介する人がいるが、遠水は近火を救わずであり、一番よい方法はやはり日本語の書籍や新聞を直接読む能力を国民に身につけさせることである。¹⁰ (下線は筆者)

つまり、その具体的な方法は日本語の読解力を国民に身につけさせ、日本の書籍や新聞を直接読ませることによって、最終的に日本を正視し、研究し、認識することを実現させることである。したがって、張我軍による日本語教授は日本語の読解力の養成を目標としたものだと考えられる。この点については、前述の1巻2号の「怎麼樣學習日文」、1巻5号の「爲日文課程事告學校當局」、1巻6号の「關於日文課程的另一忠告」という3篇の論述によって具体的に表れている。

張我軍は1巻5号の「爲日文課程事告學校當局」において、まず、日本語の読解力を日本語教育効果の判断基準とした。北京市では日本語を第2外国語として開設した大学が多いが、日本語の読解力を習得した学生が非常に少なかった。読解力に優れた学生がいたとしても大学ではなく、校外の塾に通って習得した人が多いと考え、大学の日本語教育は失敗したと明言した¹¹。そして、張我軍は大学の改善策として、教授方針の制定、教師募集、学校の設備という3つの方面から、以下のように学校側に提言した。

一、課程には一定の教授方針が必要で、1年目は毎週6時間、精力を傾注して自分で参考書が読めるまで学生に勉強させる。2年目は毎週2時間、本を読む方法を指導してもよいが、この2時間がなくてもよい。もし、1年目に毎週6時間設置するのが困難である場合は、4時間の設置でもよく、学生が自分で辞書を引いて、
わざわざ参考書が読めるまで、文法の基礎知識を教授する。こ

¹⁰ 張我軍「本誌的使命」『日文與日語』創刊号、1934年、2頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「養成國人閱讀書報的能力。這是促進國人正視，研究，認識日本的最積極最切實的方法。（中略）即使目前有人在介紹，也是遠水救不了近火，故最善的方法，還是使國人能直接閱讀日文書報。」

¹¹ 張我軍「爲日文課程事告學校當局」『日文與日語』第1巻第5号、人人書店、1934年、1頁。

の場合は、2年目に毎週2時間設置したほうがよい。二、教師募集においては、確実な日本語教授能力を持って、短期間で学生に本を読む力を身につけさせる能力を持っている者を選ぶべきである。情実関係によって人をポストにつけることは絶対やってはいけない。三、(中略)他に、学生が学んだ知識を随時発揮して応用することができるように、日本語の書籍、新聞、雑誌などを多めに置く必要がある。¹² (下線は筆者)

この内容により、教授方針においては、日本語の参考書が読めることを目標とし、教師募集においては、日本語教授能力だけでなく、学生に日本語の読解力を習得させる能力も要求し、学校の設備においては、日本語の読物の設置を提言したことが分かる。これらの学校側に対する提言は主に日本語の読解力の養成を目指したものだと考えられる。また、学生側に対する提言にも同じような特徴が見られる。張我軍は1巻6号の「關於日文課程的另一忠告」において、日本語の読解力の養成を日本語学習の目標として明確にすべきだと主張している¹³。

日本語の読解力の養成をめぐるのは、張我軍は以上のような当時の大学の日本語教育に対する批判や提言以外に、既存の日本語学習法に対しても分析や批判を行なった。彼は1巻2号の「怎樣學習日文」において、既存の日本語学習法を「囫圇吞棗式」(ナツメ丸飲み式)、「由話入文式」(会話から文に入る方式)、「會話與文法併學」(会話と文法を同時

¹² 張我軍「爲日文課程事告學校當局」『日文與日語』第1巻第5号、人人書店、1934年、2頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「一、課程必須有一定的標準，第一年每週六小時，僅一年之間使學生集中精力，學到能自閱參考書爲止。第二年每週再授二小時，指導其看書方法也可以，但是這倆小時不要也可以。若每週六小時辦不到，也可以減爲四小時，授以語法基礎，至自己能查字典，且略能閱讀參考書爲止，第二年再授二小時方爲妥當。二、教師須選擇確能教授日文，使學生于短期間習得閱書能力者，萬不可顧慮情面，取安插主義。三、(中略)此外尚須多多豫備日文書報雜誌使學生隨時有發揮應用其所學的智識。」

¹³ 張我軍「關於日文課程的另一忠告」『日文與日語』第1巻第6号、人人書店、1934年、2頁。

学習)、「死記公式」(文型丸暗記)という4種類に分け、それぞれの特徴と欠点を分析した。その分析内容を表2に要約する。

表2 従来の日本語学習法に関する張我軍の分析¹⁴

学習法の名称	特徴と欠点の要約
「囫圇呑棗式」 (ナツメ丸飲み式)	特徴: 「ず」や「ない」などのいくつかの否定助動詞を覚え、日本語を中国語に訳す際に、日本語の漢字とほかの要素を前後置き換える。 欠点: 「必ず」を「不必」に、「少ない」を「不少」にするように、 <u>間違いが多い</u> 。
「由話入文式」 (会話から文に入る方式)	特徴: まず日本語会話を勉強し、会話ができれば、自然に書籍を読めるようになる。これは日本の植民地での日本語教授法で、多くの日本人教師に採用された教授法でもある。 欠点: <u>読解力の養成までは相当時間がかかる</u> 。日本語の学習時間が毎週6時間である場合は、読解力の養成までは、5、6年が必要である。
「會話與文法併學」 (会話と文法を同時学習)	特徴: 会話式読本 ¹⁵ を日本語教材にし、会話を学習すると同時に、文法を学習する。 欠点: 会話式読本には、学習した文法とのつながりが弱く、 <u>本を読むことに応用できない内容が多い</u> 。また、名詞、代名詞、動詞などのような品詞順に文法を丸暗記するのは、 <u>面白くない</u> 。
死記公式 (文型丸暗記)	特徴: 新しい学習法であり、日本語の文型を丸暗記することによって、日本語の本を読む力を習得する。文型を学習した後、すぐに日本語の書籍から実際例が見つかるので、学生に人気がある。 欠点: 文法上の分析や語形変化が軽視されるので、 <u>高いレベルまで行けない</u> 。 <u>機械的で、学習者に興味をもたせることができないので、覚えても活用しにくい</u> 。

(『日本文と日語』(第1巻第2号、1-2頁)より筆者作成)

¹⁴ 学習法の名称は張我軍が中国語でつけたもので、括弧内は筆者が日本語に直訳したものである。「特徴と欠点の要約」の下線は筆者による。

¹⁵ 「会話式読本」は張我軍がつけた名称である。会話文を本文とした日本語教材を指す。

「囫圇呑棗式」と「會話與文法併學」は最終的に読解力の養成につながらないことから、張我軍はこのやり方を完全に否定した。

「由話入文式」は日本の植民地で常に使われた「直接教授法」でもあり、学習者の母語を用いずに、日本語だけを用いて説明する方法である。この学習法によって最終的に読解力の養成を実現させると考えられ、また、張我軍自身も台湾の公学校でこのような方法による日本語教育を受けたが、読解力の養成まで相当時間がかかることを理由に勧められていない。

「死記公式」は当時の新しい学習法・教授法として学生に人気があったという。張我軍と同じ時期に、北京で日本語を教授した汪大捷¹⁶はこのような方法を採用した。この方法の利点について、汪は「読者はその文型を真似して、自分で文を作る練習を行なうことができる。翻訳する時も、このような基本的な形式を利用して、文の成分を分析すれば、その文の意味は自然に分かる」¹⁷と述べている。しかし、張我軍はこの学習法は文法上の分析や語形の変化を軽視していることから、高いレベルの日本語能力を習得できないと述べ、丸暗記は機械的で、学習者に興味をもたせることができず、覚えても活用しにくいと指摘した。

以上のことから、張我軍が提唱する日本語教授は単純に日本語の読解力の養成を目指したのではなく、それと同時に効率性や知的興味にも配慮したものだと考えられる。

¹⁶ 汪大捷（1906～2000）は中国の日本語教育家で、1930年代に、北京で日本語を教えていた。中華人民共和国が成立した後、北京対外貿易学院（現在の対外経済貿易大学）の教授を務めた。1930年代に、100の文型を取めた『日華対照日文翻訳着眼点』という日本語教材を作成した。

¹⁷ 汪大捷「告読者」『日華対照日文翻訳着眼点』（3版）北平午未日文研究社出版、1936年、1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「讀者可仿其規模，自己練習（作文）造句。遇翻譯時，更可應用此種基本形式，解剖其句之成分，則意義自易明瞭」

3.2 「文法+読本」の日本語学習法・教授法

日本語教授においては、張我軍は常に教授法というものを重視していると言える。彼は1巻6号の「關於日文課程的另一忠告」において、日本に留学した人はだれでも日本語を教授できるわけではなく、教授対象によって教授法が違い、日本語研究を専門とした日本の文学博士でも中国の大学の日本語課程を担当できるとは限らず、中国人学生向けの教授法を持っていることは、大学の日本語教師としての重要な資質の一つであると指摘した¹⁸。しかし、前述のように、当時の既存の日本語学習法・教授法には、張我軍に認められたものがない。そのため、張我軍は1巻2号の「怎麼樣學習日文」において、以下のように、当時の大学の日本語学習者のために、新しい日本語学習法を提案した。

我が国の学生は日本語を学習する際に、文法より着手すべきである。(中略) 各種の文法規則を読本の中に融合させるべきである。読本を通じて文法を学ばば、読本の文章をはっきり理解すると同時に、自然に文法を習得することができる。文法を学ぶ時には、分析と運用を同時に学ぶべきであり、特に文の構造における中国語との異同に注意しなければならない。そして、読本の文章を作成する時に、実用的なもので文法の難易度に合わせた材料を選ぶべきである。最後に、各種の文型、各種の特別なPhraseやIdeam (ママ)を随時取り入れなければならない。学生はこれらの文型やPhrase及びIdeam (ママ)について、各種の単語と同じように、暗唱しなければならない。¹⁹ (下線は筆者)

¹⁸ 張我軍「關於日文課程的另一忠告」『日文與日語』第1巻第6号、人人書店、1934年、1頁。

この新しい学習法は一言で言えば、「文法＋読本」であり、読本を通じて文法規則を学ぶものである。当時の日本語学習については、「日本語の学習即ち語法の学習」²⁰と徐敏民（1996）が指摘したように、日本語の書籍を読むための文法学習を中心としたものだと考えられる。これは日本語を通じて西洋の學術文化を学ぶという清末以来の日本語学習の社会背景の然らしめるところである。張我軍が提案した新しい学習法は、従来の文法中心という枠を超えたものではないが、読本による自然な文法習得が強調され、知的興味や効率性が重視されたものである。この学習法の特徴は、難易度によって配列された文法項目を読本の文章に融合させることにある。学ぶ際に文章の中には文法項目の使用例がすぐ見られるため、単純に文法知識を暗記するより面白味があり、学んだ文法項目の運用能力も向上できるため、効率的な文法習得の方法だと考えられる。そして、読本の文章に随時各種の句型や慣用句を取り入れ、学生に暗唱させることが要求されたことから、「死記公式」という既存の日本語学習法の読解力養成におけるメリットを吸収した面も窺える。また、中国語の利用という点から見ると、単に中国語によって意味を理解させるだけでなく、文の構造における中国語と日本語の対照も要求されている。このような中国語の利用方法は、日本語の文法に対する理解においても、日本語の読解力や翻訳力の養成においても、良い効果が得られると考えられる。

このように知的興味や効率性に配慮し、日本語の読解力の養成を目指

19 張我軍「怎麼樣學習日文」『日文與日語』第1卷第2号、人人書店、1934年、2-3頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我以爲我國學生學習日文，應由文法入手。（中略）我以爲應該將文法上的各種規則融化於讀本之中，由讀本學文法。至於文法之學習，須分析與運用並行，學者尤須注意其與國語的組織上之異同。其次，讀本中的文句，須選擇切於實用的材料，且能與文法之繁簡相策應者。最後，須隨時加入各種句法，各種特別的Phrase, Ideam（ママ）之類，學生對這些句法，Phrase與Ideam（ママ）須與各種單詞一樣誦記之。」

20 徐敏民（1996）『戰前中国における日本語教育』エムティ出版、1996年、262頁。

した日本語学習法が提出されたが、良い効果が得られるには質の高い読本が必要で、それほど容易に実践できるものではないと考えられる。そのため、張我軍は実際の日本語教授においてどのように対応したのかを検討する必要がある。以下では『日文與日語』の日本語講座の内容を分析することにより、日本語教育実践における張我軍の教授特徴を考察する。

4. 日本語講座からみた張我軍の日本語教授観

4.1 日本語講座の構成

日本語講座は『日文與日語』の根幹的な部分であり、主に張我軍によって執筆され、前述の彼の日本語教授理念の重要な実践の場だと考えられる。張我軍が執筆した日本語講座の名前は途中変更されたことがあるが、基本的に「初級日本語講座」と「中上級日本語講座」の二つに分けることができる。「初級日本語講座」は創刊号から第1巻第12号まで、12回に分けて行なわれ、「中上級日本語講座」は全24期にわたって行なわれた。各講座に設けられたコーナーは、名前が変更したり、合併されたりしたが、構成においてほぼ同じで、主に「文法説明」と「読本」の二つに分けることができる。

「文法説明」は「読本」の各課の文章に含まれた文法項目に対する解説ではなく、日本語の文法体系に関する説明で、学習者に日本語の文法知識を体系的に習得させるために設けられたものだと考えられる。張我軍は日本語の文法体系を説明する際に、山田孝雄の『日本文法講義』と『日本口語法講義』を参考にし、語論と句論に分け、語論を更に語の性質と語の用い方に分けている。「初級日本語講座」の「文法説明」は、口語文法の語の性質を中心としたものである。「中上級日本語講座」の「文法説明」は、口語文法の語の用い方と句論を中心とし、文語文法を

兼ねたものである。

「読本」は各講座の中心的な教授内容で、主に日本語の文章によって構成され、課ごとに「講解」と「訳文」²¹が付いている。「講解」は主に日本語の文章に含まれた文法・文型項目に対する中国語の解説で、張我軍の教授特徴がはっきり窺える部分だと言える。「訳文」は学習者の意味理解及び翻訳力の向上を図るために設けられた中国語の訳文である。

前述のように、張我軍が提唱する「文法+読本」の学習法には、質の高い読本が重要なものだと考えられる。そのため、以下では、まず、「読本」に採録された日本語の文章の特徴を分析し、それに表れた張我軍の日本語教授観を考察する。そして、「講解」に対する分析を加え、「文法+読本」の理念はどのように実際の日本語教授に取り入れたのかを探究する。

4.2 「読本」の文章の特徴に表れた日本語教授観

4.2.1 「初級日本語講座」の「読本」に取り入れた文章

「初級日本語講座」の「読本」は、51課からなっており、第1課から第6課までは発音の部分であり、第7課から第51課までは基礎文法の学習を中心とし、張我軍が自作した日本語の文章によって構成されている。発音の部分では、平仮名と片仮名はほぼ同時に導入されているが、第7課からの文章では、漢字片仮名交じり文がまず導入され、第27課以降は漢字平仮名交じり文になった。各課の文章はほとんど3段落に分かれているが、文同士の内容に関連性が薄く、文法・文型項目の例文の組み合わせという色彩が強く、文法・文型項目の紹介を中心としたものと思われる。また、各課の主な文法項目が課のタイトルとして直接掲載されている。(図1を参照)

²¹ 「初級日本語講座」の「読本」の第1～7課は「訳文」が付いていない。

<p>第四十四課 逆遷前接句</p> <p>空が曇つてゐるけれども雲が降るとも限つてゐない。雨が降るやうであるけれども矢張り行くことにした。けれども早く帰つて来ることにした。</p> <p>（五）反意に「けれども」は「然し」「然るに」に似て、無智を人間と雖も反抗せずには居られぬ。知識が乏しい體でも生の意志は強ある者です。如何に世間知らずとは云へ、善惡へ解らぬ善悪は無い。</p> <p>（六）「けれども」は法律の阻に「抑へず」その進取の歩を止めない。彼は處女と雖も進んで居る。その進取の歩を止めない。彼は處女と雖も進んで居る。</p> <p>（七）「けれども」は「然し」「然るに」に似て、無智を人間と雖も反抗せずには居られぬ。知識が乏しい體でも生の意志は強ある者です。如何に世間知らずとは云へ、善惡へ解らぬ善悪は無い。</p> <p>（八）「けれども」は法律の阻に「抑へず」その進取の歩を止めない。彼は處女と雖も進んで居る。その進取の歩を止めない。彼は處女と雖も進んで居る。</p> <p>（九）「けれども」は「然し」「然るに」に似て、無智を人間と雖も反抗せずには居られぬ。知識が乏しい體でも生の意志は強ある者です。如何に世間知らずとは云へ、善惡へ解らぬ善悪は無い。</p> <p>（十）「けれども」は法律の阻に「抑へず」その進取の歩を止めない。彼は處女と雖も進んで居る。その進取の歩を止めない。彼は處女と雖も進んで居る。</p>	<p>（基礎讀本）第二十七課 能力句</p> <p>私が日本語を話す。私に日本語が話される。</p> <p>（一）助詞が</p> <p>（二）動詞が</p> <p>（三）名詞が</p> <p>（四）形容詞が</p> <p>（五）副詞が</p> <p>（六）助動詞が</p> <p>（七）助詞が</p> <p>（八）動詞が</p> <p>（九）名詞が</p> <p>（十）形容詞が</p> <p>（十一）副詞が</p> <p>（十二）助動詞が</p> <p>（十三）助詞が</p> <p>（十四）動詞が</p> <p>（十五）名詞が</p> <p>（十六）形容詞が</p> <p>（十七）副詞が</p> <p>（十八）助動詞が</p> <p>（十九）助詞が</p> <p>（二十）動詞が</p> <p>（二十一）名詞が</p> <p>（二十二）形容詞が</p> <p>（二十三）副詞が</p> <p>（二十四）助動詞が</p> <p>（二十五）助詞が</p> <p>（二十六）動詞が</p> <p>（二十七）名詞が</p> <p>（二十八）形容詞が</p> <p>（二十九）副詞が</p> <p>（三十）助動詞が</p> <p>（三十一）助詞が</p> <p>（三十二）動詞が</p> <p>（三十三）名詞が</p> <p>（三十四）形容詞が</p> <p>（三十五）副詞が</p> <p>（三十六）助動詞が</p> <p>（三十七）助詞が</p> <p>（三十八）動詞が</p> <p>（三十九）名詞が</p> <p>（四十）形容詞が</p> <p>（四十一）副詞が</p> <p>（四十二）助動詞が</p> <p>（四十三）助詞が</p> <p>（四十四）動詞が</p> <p>（四十五）名詞が</p> <p>（四十六）形容詞が</p> <p>（四十七）副詞が</p> <p>（四十八）助動詞が</p> <p>（四十九）助詞が</p> <p>（五十）動詞が</p> <p>（五十一）名詞が</p> <p>（五十二）形容詞が</p> <p>（五十三）副詞が</p> <p>（五十四）助動詞が</p> <p>（五十五）助詞が</p> <p>（五十六）動詞が</p> <p>（五十七）名詞が</p> <p>（五十八）形容詞が</p> <p>（五十九）副詞が</p> <p>（六十）助動詞が</p> <p>（六十一）助詞が</p> <p>（六十二）動詞が</p> <p>（六十三）名詞が</p> <p>（六十四）形容詞が</p> <p>（六十五）副詞が</p> <p>（六十六）助動詞が</p> <p>（六十七）助詞が</p> <p>（六十八）動詞が</p> <p>（六十九）名詞が</p> <p>（七十）形容詞が</p> <p>（七十一）副詞が</p> <p>（七十二）助動詞が</p> <p>（七十三）助詞が</p> <p>（七十四）動詞が</p> <p>（七十五）名詞が</p> <p>（七十六）形容詞が</p> <p>（七十七）副詞が</p> <p>（七十八）助動詞が</p> <p>（七十九）助詞が</p> <p>（八十）動詞が</p> <p>（八十一）名詞が</p> <p>（八十二）形容詞が</p> <p>（八十三）副詞が</p> <p>（八十四）助動詞が</p> <p>（八十五）助詞が</p> <p>（八十六）動詞が</p> <p>（八十七）名詞が</p> <p>（八十八）形容詞が</p> <p>（八十九）副詞が</p> <p>（九十）助動詞が</p> <p>（九十一）助詞が</p> <p>（九十二）動詞が</p> <p>（九十三）名詞が</p> <p>（九十四）形容詞が</p> <p>（九十五）副詞が</p> <p>（九十六）助動詞が</p> <p>（九十七）助詞が</p> <p>（九十八）動詞が</p> <p>（九十九）名詞が</p> <p>（百）形容詞が</p>
<p>（『日文與日語』 1 - 7, p9）</p>	<p>（『日文與日語』 1 - 11, p11）</p>

図1 「初級日本語講座」の「読本」の一部（『日文與日語』）

張我軍が提唱する「文法+読本」の学習法は、この読本に強く表れていると考えられる。各課の「講解」の記述とタイトルをもとにし、初出の主な文法・文型項目を取り上げ、表3にまとめた。表3で示したように、基礎段階の各文法・文型項目が難易度によって各課の文章に配分された。学習者がこの読本を学ぶ際に、文章の意味理解によって自然に文法・文型項目の用法などが習得できると考えられ、文法知識の丸暗記より、興味を引く効率的なものだと言えるだろう。これまで、中国大陸では数多くの日本語教材が発行されたが、それらは基礎文法を導入する際に、文法・文法項目をまとめて説明している。例えば、『日文津梁』²²も文法と読本の統一を目指して作成された教材であるが、助詞や助動詞な

²² 1936年7月に発行され、著者の傅仲濤は当時、北京大学と燕京大学の日本語教師であった。北京大学の日本語クラスで使われていたと考えられる。

どの品詞をまとめて説明したものである。また、当時の中華民国教育部の審査に通った『現代日語』²³もすべての助詞を一つの課にまとめて説明した教材である。現在の視点からみれば、文同士の内容に関連性が薄い張我軍の「読本」は、良い日本語教材とは言えないが、基礎文法をまとめて導入した上記のような当時の日本語教材より、学習者に興味を持たせ、効率的に文法を習得させることができ、大きな前進だと言える。

表3 「初級日本語講座」の「読本」〔文法・文型項目〕

巻・号	課	主な文法・文型項目
1-1	1 4	1. 五十音図(片仮名、ローマ字) 2. いろは(平仮名、片仮名) 3. 撥音、濁音、半濁音 4. 促音、拗音
1-2	5 8	5. 長音、踊り字、合略仮名 6. 転呼音 7. 名詞+の+名詞、名詞+と+名詞 8. 数字+の+名詞
1-3	9	形容詞による連体修飾
	10	連体修飾を含む動詞文(四段活用動詞:辞書形)、が(格助詞)、を(格助詞)
	11	連体修飾を含む動詞文(上一段活用動詞:辞書形、ない形)
	12	連体修飾を含む動詞文(下一段活用・サ変・カ変動詞:辞書形、ない形)、に(格助詞:目的地)
1-4	13	連体修飾を含む存在文・所在文(辞書形、ます形:肯定)、は(副助詞)、に(格助詞:存在場所)
	14	連体修飾を含む存在文・所在文(ない形、ます形:否定)、も(副助詞)、副詞+に
	15	名詞文(～である、～ではありません)
	16	名詞文(～でない、～じゃない、～ではありません、～でありませぬ)
	17	～ている、～おる、～である、動詞連用形+つつある、～から～まで
	18	形容詞文(辞書形、ない形、ます形、イ形容詞連用形+ございます)、より(格助詞:比較)
1-5	19	動詞文(た形)、動詞の音便
	20	用言+う・よう(意志)、へ(格助詞)、に(格助詞:時間、目的)と(助詞:引用)
	21	用言+う・よう(推量)、が(接続助詞)、の(形式名詞)
	22	～らしい、～ようだ、だけ(副助詞)

²³ 当時の東方夜校日文主任教授の蔣君輝によって作成され、全2冊で初版は上巻が1930年に、下巻が1931年に発行された。

1 - 6	23	～そうだ、～てしまう、で（格助詞：動作の場所、手段、原因）
	24	～を以て、～のために、～まい
	25	受身文（～に・から～れる・られる）、こそ（副助詞）
	26	受身文（～のために～れる・られる、～によって～れる・られる）、さえ（副助詞）
1 - 7	27	可能文（～れる・られる）、から（接続助詞：原因）
	28	可能文（できる）、～ても、ばかり（副助詞）
	29	可能文（～ことを得る、用言連用形+得る）
	30	使役文（～せる・させる）
1 - 8	31	使役文（～をして～動詞未然形+しめる）
	32	～たい、か（副助詞）、～について
	33	疑問文（～ましたか、～ですか、～ますか）、形容詞の補助活用
	34	命令文（動詞の命令形、動詞連用形+たまへ、動詞連用形+なさい）
1 - 9	35	依頼文（～てくれ、～てください、～ないでくれ、～ないでくださいませ）
	36	禁止表現（～な、～てはいけない、～てはならない）、ね（助詞）、や（助詞）、ぞ（助詞）、のに（接続助詞）
	37	～なくてはならない、～ねばならない、～なければならぬ、
1 - 10	38	敬語（お+名詞・数詞・形容詞、～でございます）、～しか～ない
	39	敬語（おっしゃる、いらっしゃる、なさる、参る、上がる、申す、致す）
	40	敬語（れる・られる、お+動詞連用形+なさる、お+動詞連用形+になる）
	41	敬語（お+動詞連用形+する、お+動詞連用形+致す、お+動詞連用形+申す）
1 - 11	42	～ば、～たら、～なら、～ならば、～と、～も～ば～も
	43	～には、～ためには、～といえ、～といふに、～にせよ、～にしる、～ざるをえない、～わけにはいかない、～とは限らない
	44	～けれども、～といえども、～とはいえ、～にもかかわらず、～ことになる、～ことにする、～ずにはいられない、～はずだ、～はずはない
	45	～とも、～にしても、～としても、～にすぎない、～に定っていない、～からだ
	46	～以上（は）、～限り（は）、～度に、～毎に、～度毎に、～と共に
1 - 12	47	～に他ならない、～より外はない、～かもしれない、～いうまでもない
	48	～と同時に、～か～ない中に、～や否や、～か否か
	49	～には及ばない、～からといって、～どころでなく・どころか、～ほど、～ば～ほど
	50	～代わりに、～として
	51	授受補助動詞（～てあげる、～てやる、～てくださる、～てくれる、～てもらう、～ていただく）

（『日文與日語』第1巻より筆者作成）

4.2.2 「中上級日本語講座」の「読本」に取り入れた文章

「中上級日本語講座」の「読本」は、張我軍が執筆したものではなく、他から採録した日本語の文章である。これらの文章を中級と上級に分け、文章名とその分野、文体、出典などを表4、表5にまとめた。

中級の「読本」に取り入れたのは、中級日本語講座の「中級文範」というコーナーに収録された51篇の文章と、「日語基礎文選講義」²⁴というコーナーに収録された6篇（*）の文章である。57篇の文章には、漢字平仮名交じり文がほとんどで、漢字片仮名交じり文は9篇である。口語文の文章だけでなく、12篇の文語文の文章も選ばれた。当時、日本語の書物の多くは口語文で書かれたものであるが、法律書、医学書、古典文書などの書物はまだ文語文で書かれていた。日本語の読解力の養成を目指した張我軍は、文体にも配慮していたと考えられる。

「読本」に存在する文章の出典や分野からみれば、第1巻の21篇の文章は、主に日本文学者の随筆、倫理学や社会思想関係の論説文から採録したものであるが、第2巻以降の36篇はすべて日本の国語読本から採録したものである。第1巻の文章の多くは複雑で長い文が多く、比較的難しいものであるが、第2巻以降の文章は、日本の小中学生向けの説明文と物語文を中心としたもので、理解するには比較的容易なものである（図2を参照）。初級段階の基礎文法の学習が終わってから文学の名著や論説文を学ぶより、平易な説明文や物語文によって中級段階に移行したほうが、スムーズに学ぶことができ、基礎文法の知識を固めることにも役立つと考えられる。そのため、張我軍は第1巻の内容が難しく中級レベルに合わないことに気付き、あるいは読者の意見により、文章の難易

²⁴ 「日語基礎文選講義」は張我軍が比較的低いレベルの読者のために、第3巻第3号から設けられたコーナーであるが、一定の基礎知識を持っている読者向けのものであるため、本稿ではその中の文章を中級の「読本」として取り扱っている。

度を低くするために、第2巻より比較的平易な国語読本の文章を選んだ可能性がある。

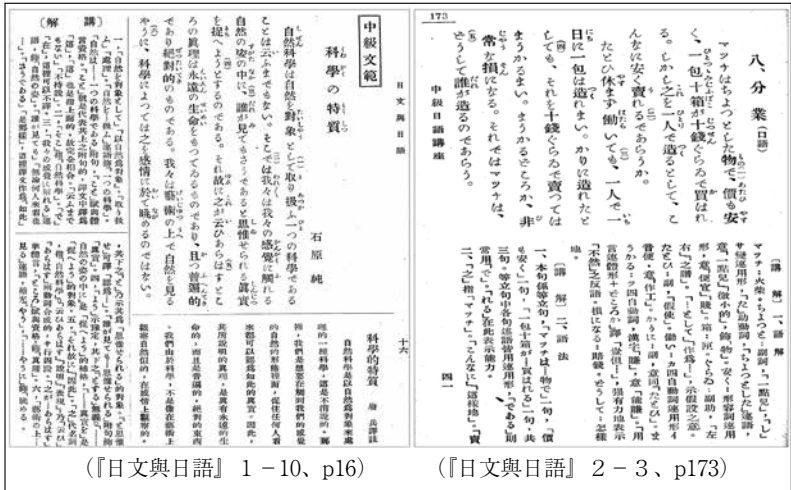


図2 「中級日本語講座」の「読本」の一部(『日本文語』)

一方、日本の国語読本から採録した36篇の日本語文章には、『尋常小学国語読本』²⁵からの選択が27篇、『小学国語読本』²⁶からの選択が6篇²⁷、『高等小学読本』²⁸からの選択が2篇、『中等国語読本』²⁹から選択し

²⁵ 『尋常小学国語読本』は第3期国定国語教科書であり、全12巻で1918年から1932年まで日本の尋常小学校で使用された。
²⁶ 『小学国語読本』は第4期国定国語教科書であり、全12巻で1933年から1940年まで日本の尋常小学校で使用された。
²⁷ 「春が来タ」、「考へ物」という2篇は『小学国語読本』と『尋常小学国語読本』の両方にもある。この2篇と同じコーナー(「日語基礎文選講義」)に採録された残りの4篇は、すべて『小学国語読本』から採録したものであるため、この2篇も同じように『小学国語読本』から採録した可能性が大きい。
²⁸ 戦前の高等小学校用の国語読本である。本稿では、巻1(1926年発行版)、巻2(1935年発行版)を参考にした。
²⁹ 戦前の中学校用の国語読本である。本稿では、巻1(新修2版、1930年発行)を参考にした。

たものが1篇である。『小学国語読本』は第4期国定国語教科書であり、1933年から日本の尋常小学校で使用し始めたが、1935年7月時点で全12巻までは発行されず、巻6まで発行された。そのため、比較的低いレベルの読者のために設けられた「日語基礎文選講義」というコーナーに取り入れた6篇だけは、『小学国語読本』（巻1～巻3）から選択した文章であるが、残りの多くは、第3期国定国語教科書である『尋常小学国語読本』（巻7～巻12）から選択した文章である。また、『尋常小学国語読本』は大正デモクラシー期の教科書で、内容的な特徴としては童話・童謡など児童が興味を持つ文学作品が多く採用され、外国紹介あるいは外国人を主人公とした国際的な視野にたった文章も目立つ³⁰。知的興味を重視している張我軍はその特徴にも注目していたと考えられる。彼は「燈台守の娘」「獅子と武士」「犬ころ」などの児童が興味を持つ作品以外に、「ナイヤガラのカニ」「パナマ運河」「ヨーロッパの旅」「リンカーンの苦学」などの日本以外の国や人の紹介文も採録した。そして、『日文與日語』の最後の2期に、『尋常小学国語読本』の代わりに、『高等小学読本』と『中等国語読本』から文章を採録したことから、張我軍が漸次中級の「読本」の難易度を上げていく意図が窺える。

上級の「読本」³¹に取り入れた20篇の文章は、すべて漢字平仮名交じり文で、口語文の文章である。その中には、小説が9篇、論説文が6篇、随筆が4篇、日記が1篇である。このように日本の文学作品と論説文を中心とした構成は、第1巻の中級の「読本」と同じであるが、中級の「読本」に随筆が多いのに対し、小説が比較的多く採録され、また、論

³⁰ 滋賀大学附属図書館編著『近代日本の教科書のあゆみ：明治期から現代まで』サンライズ出版、2006年、27頁。

³¹ 上級日本語講座には、当時の新聞に載せた記事を取り上げ、「註解」と「訳文」が付いた「時文譯注」というコーナーがあるが、本稿ではその中の日本語の記事を「読本」として取り扱っていない。

説文も中級のものより長くなり、何回にもわたり連載されたものもある。上級の「読本」の難易度が中級より全体的に上げられたと言える。

以上により、「中上級日本語講座」の「読本」の文章は無秩序に配列されたわけではなく、文章の難易度が各段階の文法学習に合うかどうか配慮して選択されたものである。中級では、最初は主に随筆を中心とした文学名著や短篇の論説文が選択されたが、これは難易度が合わないことが原因だと考えられ、中級の「読本」は第2巻から、比較的平易な小学校低学年用の国語読本の文章を採録し始め、漸次小学高学年や中学校レベルまで上げた。上級では最終的に読解力の養成を目指し、難易度が上げられ、小説や長編の論説文が選択された。内容面から見れば、当時の日本近現代文学作品と各分野の論説文が中心になっている。その理由としては、日本語を通じて世界各国の学術文化を学ぶという社会背景や張我軍自身の日本語教育の目的と関連していると考えられるが、それに関して詳しく述べるのは、本稿の本旨ではないため、ここでは論述しない。

表4 中級の「読本」に採録された文章

巻・号	文章名	分野	文体、出典など
1-1	春	随筆	丁寧体、漢字平仮名文、出典不明
	一口ばなし	物語文	丁寧体、漢字平仮名文、出典不明
	窓	随筆	普通体、漢字平仮名文、出典不明
1-2	負け嫌ひな蛙	物語文	丁寧体、漢字平仮名文、内堀維文著『日語読本』
	地球の話	説明文	丁寧体、漢字平仮名文、出典不明
	「點心」自序	随筆	普通体、漢字平仮名文、芥川龍之介著『點心』
1-3	正直であれ	随筆	普通体、漢字平仮名文、吉田絃二郎の作品
1-4	ヨオロツバ文明の行詰り	論説文	普通体、漢字平仮名文、高須芳次郎の作品
1-5~6	論理学の性質	論説文	普通体、漢字平仮名文、速水滉著『倫理学』
1-6	晩秋の日	随筆	普通体、漢字平仮名文、小川未明の作品
1-7	思想	論説文	普通体、漢字平仮名文、金子馬治著『欧州思想大観』
	風	随筆	文語文、漢字平仮名文、徳富蘆花著『自然と人生』

1-8	社会思想の部類	論説文	普通体、漢字平仮名文、高島素之『社会思想講座』
	要談と閑話	随筆	文語文、漢字平仮名文、徳富蘇峰の作品
1-9	母と蘆	随筆	普通体、漢字平仮名文、西條八十の作品
	浪漫的結婚と論理的結婚	論説文	普通体、漢字平仮名文、米田庄太郎『恋愛と人間愛』
	うれしさ	随筆	文語文、漢字平仮名文、幸田露伴作の作品
1-10	科学の特質	論説文	普通体、漢字平仮名文、石原純の作品
1-11	社会思想史序説	論説文	普通体、漢字平仮名文、波多野鼎の作品
	芥川龍之介君よ	随筆	文語文、漢字平仮名文、菊池寛の作品
1-12	不潔を厭はぬ人々	随筆	丁寧体、漢字平仮名文、田上三郎著『世界の奇習と奇観』
2-1	動物の色	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻9
	ナイヤガラの瀧	説明文	丁寧体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻9
	横濱	説明文	文語文、漢字片仮名文、『尋常小学国語読本』巻7
	大阪	説明文	文語文、漢字片仮名文、『尋常小学国語読本』巻7
2-2	燈臺守の娘	物語文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
	獅子と武士	物語文	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻7
2-3	水の力	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	分業	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	鷺	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	手の働	説明文	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
2-4	今日	和歌	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻9
	山の秋	随筆	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	朝鮮人參	説明文	丁寧体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	捕鯨船	随筆	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
2-5	物ノ価	説明文	文語文、漢字片仮名文、『尋常小学国語読本』巻9
	パナマ運河	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
	犬ころ	随筆	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
2-6	文天祥	伝記	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
	伝書鳩	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
	孔子	伝記	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻11
3-1	裁判	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻12
3-2	瀬戸内海	説明文	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻11
	太陽	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻12
	新聞	説明文	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻11
3-3	山ノ上(*)	随筆	普通体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻2
	オ月サマ(*)	随筆	丁寧体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻2
	ヨーロッパの旅	紀行文	丁寧体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻12
	霧	歌	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10

3-4	兔ト亀（*）	物語文	丁寧体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻1
	獅子ト鼠（*）	物語文	丁寧体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻1
	リンカーンの苦学	伝記	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻11
3-5	春が来タ（*）	童謡	普通体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻3
	考へ物（*）	会話文	丁寧体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻3
	人生の曙	随筆	普通体、漢字平仮名文、『中等国語読本』巻1
3-5~6	スバルタ武士	随筆	文語文、漢字平仮名文、『高等小学読本』巻1
3-6	植物と氣象	随筆	普通体、漢字平仮名文、『高等小学読本』巻2

（『日文與日語』より筆者作成）

表5 上級の「読本」に採録された文章

巻・号	文章名	分野	文体、出典など
1-1~8	現代政治思想の主潮とその破綻	論説文	普通体、漢字平仮名文、大山郁夫著『政治の社会的基礎：国家権力を中心とする社会闘争の政治学的考察』
1-2	セメント樽の中の手紙	小説	丁寧体、漢字平仮名文、葉山嘉樹の作品
1-3	侏儒の言葉	随筆	普通体、漢字平仮名文、芥川龍之介著『侏儒の言葉』
1-4	静夜日記	日記	普通体、漢字平仮名文、生田春月の作品
1-5	雷雨の夜	小説	普通体、漢字平仮名文、ゴーリキー著・二葉亭四迷訳『乞食』
1-6	低能児	小説	普通体、漢字平仮名文、加藤武雄著『感謝』
1-7	武器	随筆	普通体、漢字平仮名文、芥川龍之介著『侏儒の言葉』
1-9~10	批評と鬥志	論説文	普通体、漢字平仮名文、片上伸著『文学評論』
	轉生	小説	普通体、漢字平仮名文、志賀直哉の作品
1-11~12	少年の悲哀	小説	普通体、漢字平仮名文、國木田独歩の作品
2-1	雨の趣味	随筆	普通体、漢字平仮名文、黒田鵬心著『人生と趣味』
2-1~6	空想的社會主義	論説文	普通体、漢字平仮名文、エンゲルス著・堺利彦訳『社会主義の發展：空想的社會主義から科学的社會主義へ』
2-2	菖蒲の節供	随筆	普通体、漢字平仮名文、島崎藤村の作品
2-3	吾輩は猫である	小説	普通体、漢字平仮名文、夏目漱石の作品
2-4	アメリカの發明界展望	論説文	普通体、漢字平仮名文、矢部利茂の作品
2-4~6	勝負事	小説	丁寧体、漢字平仮名文、菊池寛の作品
3-1~2	空襲と民心の統制	論説文	普通体、漢字平仮名文、保科貞次著『防空の科学』
3-1~3	繪のない繪本	小説	丁寧体、漢字平仮名文、林房雄『繪のない繪本』
3-3~6	現代世界外交思潮及びその動向	論説文	普通体、漢字平仮名文、芦田均の作品
3-4~6	悪魔	小説	普通体、漢字平仮名文、谷崎潤一郎の作品

（『日文與日語』より筆者作成）

4.3 日本語講座の「講解」に表れた日本語教授観

前述のように、各講座の「読本」に付いている「講解」は、各課の知識の要点に対する中国語の解説で、張我軍の日本語教授の特徴を窺い知ることができる貴重な資料である。以下では、発音の教授と文法項目の教授の二つに分け、「講解」の特徴とそれに表れた張我軍の教授観を考察する。

4.3.1 発音の教授

張我軍は読解力の養成を日本語教授の目標とするため、課ごとに発音の教授を行わず、主に「初級日本語講座」の入門段階（1～6課）で行なった。しかし、発音の教授が軽視されたわけではない。『日文與日本語』には、第1巻第4号から第1巻第12号まで、「日文発音的研究」という日本語の発音を論述した文章を連載した。この文章は張我軍が執筆したものではないが、編集長としての張我軍が発音の研究を軽視していたわけではないことが窺える。

そして、入門段階の「講解」と他の教材には、発音の教授における張我軍の工夫も見られる。「初級日本語講座」の仮名の発音を教授する際に、主に「反切」という漢字の発音方法を利用し、「K + a = カ、枯阿切 = カ、K + i = キ、枯衣切 = キ」³²のように示している。しかし、漢字の発音は完全に日本語の発音と対応しているわけではないので、濁音などのように、漢字の発音で日本語の発音を正確に表すことができない場合もある。そのため、張我軍は1935年に発行した『日語基礎読本自修教授参考書』においては、前述の欠陥を補うために、英語の発音と中国語の注音符号を加え、以下のように教授するようになった。

「カ行」の子音は「k」であり、「k」の発音は英語のbookの「k」のようである。漢字の「客」と注音符号の「ㄎ」の発音と似てい

る。以下では注音符号を用いて「カ行」の発音を示す：ㄎㄚ、ㄎㄨ、ㄎㄨㄛ、ㄎㄨㄛ、ㄎㄨㄛ。³³

その後、1936年に発行した『標準日文自修講座』（前期第1冊）においては、張我軍は有声音、無声音、破裂音、摩擦音などの音声学の知識を加え、発声器官図や「ア、イ、ウ、エ、オ」の正面と側面の口形図を取り入れた。また、漢字の発音、英語の発音、中国語の注音符号以外に、「本行の5つの音の子音は『k』であり、後舌と軟口蓋が閉鎖して破裂させた軟口蓋音であり、漢字の『克』のようである」³⁴のように、発声器官を利用した発声方法も提示している。

しかし、張我軍による発音の教授には不足点も見られる。「初級日本語講座」の第3課の「講解」において、「日本語は抑揚（accent）がないと言えるため、読むと平らな感じである」³⁵のように提示している。その後、『標準日文自修講座』（前期第1冊、1936年）において、「日本語は抑揚があるが、抑揚の程度が極めて低く、抑揚の方法も日本全国で一致していないため、本講座では取り扱っていない。また、完全に自修する場合は、本を読む能力だけを習得すればよく、会話能力を同時に習得するのは力の及び得ることではない」のように訂正したが³⁶、そこにはアクセントの教授における限界性も見られる。

³² 『日文與日語』創刊号、人人書店、1934年、12頁。

³³ 張我軍『日語基礎読本自修教授参考書』人人書店、1935年、2-3頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「『カ行』的父音是『k』，『k』發音如英語book的『k』。漢字似『客』音，國音字母『ㄎ』，試以國音字母示此五音之音如下：ㄎㄚ ㄎㄨ ㄎㄨㄛ ㄎㄨㄛ ㄎㄨㄛ。」

³⁴ 張我軍『標準日文自修講座』（前期第1冊）、人人書店、1936年、23頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「本行五音所共通的父音是『k』，即后舌与軟口蓋合之然後使其破裂的喉音，如漢字『克』。」

³⁵ 『日文與日語』創刊号、人人書店、1934年、13頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「且日本語可以說沒有抑揚（accent），所以讀來極平順。」

³⁶ 張我軍『標準日文自修講座』（前期第1冊）、人人書店、1936年、7頁。

4.3.2 文法項目の教授

発音部分以外の各課の「講解」は主に「語解」³⁷と「文法」という2つの部分に分けられ、文法の教授を中心としたものである。「語解」は、各課の新出単語の品詞、用言の活用形、中国語訳の提示を中心としたものである。初級段階の「文法」は、文章に含まれた文法知識や文型に対する説明を中心としたもので、中上級の「文法」は、文の構造分析を中心としたものである。

この「講解」の内容により、張我軍による文法項目の教授における2つの顕著な特徴が見られる。一つは中国語訳の利用である。各課の全文には中国語訳が付けられており、「講解」にも新出単語や初出文型にも中国語訳が付けられている。そして、直訳が難しい文に対しては、以下のように別の中国語訳の方法も提示している。そこから、張我軍が単に中国語によって意味を理解させるだけでなく、翻訳力の養成を意図していることも窺える。

この文（「よく解るやうに言ってください」）は元々「請你能夠明白那樣地說罷」に翻訳すべきであるが、中国語の習慣により、「請你說得叫人能夠明白罷」に翻訳してもよい。³⁸

もう一つの特徴は、文の構造分析を重視していることである。特に「中上級日本語講座」の「講解」においては、以下のように文の構造を分析したものが中心となっている。

³⁷ 「語解」は日本語では通常使わない言葉であるが、原文のまま表記した。

³⁸ 『日文與日語』第1巻第8号、人人書店、1934年、13頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「此句原須譯『請你能夠明白那樣地說罷』，但為就國語的習慣，可以譯為『請你說得叫人能夠明白罷。』」

5. おわりに

1930年代の中国大陸の日本語学習ブームの中で、張我軍が日本語教師として名もなき一兵卒から一躍「著名人士」となれたのは、彼の独特な日本語教授観と切り離せないと考えられる。日本の対華侵略が深まった当時、「日本を正視し、研究し、認識する」ために、張我軍は日本語の読解力の養成を日本語教授の目標とした。また、この目標のために、既存の日本語学習法・教授法の特徴と欠点を分析し、「文法+読本」という新しい日本語学習法を提案した。この学習法は従来の文法中心という枠を超えたものではないが、読本による自然な文法習得が強調され、文の構造における中国語との異同や、学習者の知的興味や日本語習得の効率性が重視されたものである。

張我軍は新しい学習法を提出しただけでなく、『日文與日語』に日本語講座を開き、「文法+読本」の理念を実際の教材編集に取り入れた。初級段階では、文章を自作して、文法・文型項目を難易度によって各課の文章に配分し、文法と読本との融合を実現させた。中上級段階では、日本の文学作品、論説文、国語読本から文章を採録し「読本」を作成した。採録された文章は無秩序に取り上げたわけではなく、難易度によって合理的に中級と上級の「読本」に配列し、最終的に文法の習得や読解力の養成に有用なものとした。実際の教授の面から見れば、張我軍は読解力の養成を目指したが、発音の教授を軽視したわけではなかった。そして、文法を教授する際には、中国語訳を利用し、文の構造について分析することによって、「文法+読本」の理念を実践していたと考えられる。『日文與日語』の売れ行きが良かったことから、張我軍の教授方法は確かに当時の学習者の日本語学習に役立っていたと言えるだろう。

本稿では、『日文與日語』の論述や日本語講座に対する分析により、張我軍の日本語教授観の特徴を明らかにしたが、残りの課題もある。日

本語講座に採録された文章には、日本の国語読本と重なっている部分も多くあることから、張我軍の日本語教授観の形成は、日本の国語教育の影響を受けた面も窺える。これについては、更に深く探究する必要があると考える。また、張我軍は北京淪陥後も日本語教育界の「著名人士」として活動したが、彼の日本語教授観が戦時中の華北淪陥区の日本語教育にどれほど影響を与えたのかを解明することも今後の課題の一つである。

参考文献

日本語参考文献

- 賈鵬飛（2018）「張我軍の日本語教育実践—1930、1940年代の中国大陸における「日本国籍」台湾人による日本語教育の一側面」、『文教大学大学院言語文化研究科紀要』第4号、文教大学大学院言語文化研究科、pp.1-30
- 賈鵬飛（2017）『『日文と日語』から見た張我軍の日本語教育観とその影響—1930年代の中国大陸における「日本国籍」台湾人による日本語教育の一側面—』（2017年度日本語教育学会春季大会、口頭発表）
- 滋賀大学附属図書館編著（2006）『近代日本の教科書のあゆみ：明治期から現代まで』サンライズ出版
- 徐敏民（1996）『戦前中国における日本語教育』エムティ出版
- 孫安石（2003）「戦前中国における日本・日本語研究に関する資料の調査報告」『神奈川大学言語研究』25、pp.299-315
- 劉建雲（2005）『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂—』学術出版会 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B10070618200、三増英夫調中華民国ニ於ケル日本語研究ノ現況（附、日本近代科学図書館論）1937年（文化_37）（外務省外交史料館）

中国語参考文献

- 秦賢次（1990）「台湾新文学運動の奠基者—張我軍」『中国現代文学研究叢刊』（1990年03期）、中国現代文学館、pp.222 - 240
- 王昇遠・周慶玲（2009）「中国日語教育史視閥中の張我軍論」『台湾研究集刊』2009年第3期、厦門大学台湾研究院、pp.99 - 106
- 張光正（2012）『張我軍全集（上集）』台海出版社
- 張光正（2012）『張我軍全集（下集）』台海出版社
- 張我軍編（1934）『日文與日語』（第1卷）北平人人書店
- 張我軍編（1935）『日文與日語』（第2卷）北平人人書店
- 張我軍編（1935）『日文與日語』（第3卷）北平人人書店

参考教材

- 落合直文・金子元臣編（1930）『中等国語讀本』明治書院
- 蔣君輝（1930）『現代日語』（上卷）中華書局
- 蔣君輝（1931）『現代日語』（下卷）中華書局
- 汪大捷（1935）『表解現代日文語法講義』北平午未日文研究社
- 汪大捷（1936）『日華対照日文翻譯着眼点』（3版）北平午未日文研究社
出版
- 張我軍（1934）『日語基礎讀本』（4版）北平人人書店
- 張我軍（1935）『日語基礎讀本自修教授参考書』北平人人書店
- 張我軍（1936）『標準日文自修講座』（前期第1冊）北平人人書店
- 張我軍（1936）『標準日文自修講座』（前期第2冊）北平人人書店
- 張我軍（1936）『標準日文自修講座』（前期第3冊）北平人人書店
- 張我軍（1936）『標準日文自修講座』（前期第4冊）北平人人書店
- 張我軍（1937）『標準日文自修講座』（後期第1冊）北平人人書店
- 傅仲濤（1936）『日文津梁』梯梧山館

文部省『尋常小学国語読本』（巻1～巻12）、（復刻版、ノーベル書房、1977年）

文部省『小学国語読本』（巻1～巻12）、（復刻版、秋元書房、1970年）

文部省（1926）『高等小学読本』巻1、東京書籍株式会社

文部省（1935）『高等小学読本』巻2、東京書籍株式会社

